

令和7年度 全校研究の概要

1 研究主題

児童生徒の資質・能力の育成を目指す学習評価の在り方
～教師による学びの姿の見取りを基点とした授業改善を通して～

(1年次/2か年)

2 研究主題の設定理由

(1) 本校の目指す学校像

本校は、県内唯一の肢体不自由及び病弱者である児童生徒を対象とした特別支援学校であり、児童生徒の教育的ニーズに応じ、教育課程の異なる3つの類型と訪問教育を実施している。学校経営の方針の中で、教育目標「肢体不自由及び病弱者である児童生徒の多様な教育的ニーズに応じて、医療療育機関と連携した安全な教育環境のもとで、自立と社会参加に必要な力を育成する」が示された。教育目標の実現に向け、教育方針にある児童生徒の主体性や自主性を育むために確かな教育を展開する中で、児童生徒の心身の健康状態を的確に把握し、個々に応じた効果的で丁寧な指導を行うことが求められる。

本年度の重点では、チームによる学習評価の充実を図り児童生徒主体の授業づくりに取り組むこと、ICTを積極的に活用し校内で情報共有するとともに、肢体不自由及び病弱教育について研修を重ねながら専門性の高い授業実践をすることが位置付けられた。

(2) これまでの研究から

本校の目指す学校像を具現化するために、令和5・6年度は、研究主題「肢体不自由及び病弱教育の主体的・対話的で深い学びの授業づくり」のもと、児童生徒の育成を目指す資質・能力を育むことを目的に「単元題材構想シート」を柱とした授業づくり支援ツールを用い、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善にチームで取り組んだ。複数の教師による多面的・多角的な視点での単元構想、学習者と授業者双方の視点に立ったPDCAサイクルでの授業実践等において成果が見られた。

一方、各教科の資質・能力の育成に向けた評価規準の設定や評価方法等の学習評価の在り方、教師による児童生徒の学びの見取り方等が課題として提案された。

(3) 社会的要請と本校の実情

学習指導要領では、「何ができるようになるか」という育成を目指す資質・能力について、各教科等の目標及び内容を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理した。「どのように学ぶか」という「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業を展開する中で、「何が身に付いたか」という評価の視点を重視し、教師が授業を振り返って評価し、学習や指導の改善に生かしていくサイクルが大切である。また、観点別学習状況の評価の実施に際して、学習指導要領の規定に沿った評価規準の作成、各教科等の特質を踏まえた適切な評価方法等の工夫、評価の結果を児童生徒の学習や教師による指導の改善につなげていくことが重要である。

肢体不自由及び病弱者に加え、発達障害や知的障害を併せ有する重度重複の児童生徒が多く在籍している本校の現状を鑑みると、一人一人の教育的ニーズに応えるためには、実態把握を基に育成したい資質・能力を明確にした授業を展開する中で、教師が児童生徒の学びを丁寧に見取り、授業改善につなげていくことが大切である。特に本校に在籍している児童生徒の半数以上が自立活動を主とする児童生徒であることから、表出や反応が微細な児童生徒の見取りは重要である。日々の授業を通して教師の見取りに関する力を高めるとともに、ICT等を活用しながら児童生徒の学びを見取るための視点の整理や方法等を蓄積し、教師による見取りを基点とした授業改善に組織的かつ計画的に取り組む必要がある。

そこで、本校の目指す学校像、これまでの研究の取組、社会的要請と本校の実情を踏まえ、研究主題「児童生徒の資質・能力の育成を目指す学習評価の在り方～教師による学びの姿の見取りを基点とした授業改善を通して～」を設定した。

3 研究の目的

児童生徒の資質・能力の育成を目指すために、評価手段として見取りに焦点を当てて研究を推進する。複数の教師で児童生徒の学びの姿を見取り、見取ったことを基に授業改善を行う。併せて、児童生徒の学びの姿を見取るための手立て等の検証を行う。

<見取りの定義>

本研究における見取りとは、教師が子どもの行動・表情・反応・言葉等に表れた事実に注目し、その子どもの内面や思考の過程を推測して理解（解釈）しようとする営みであり、次の指導へのフィードバックを目的とする。

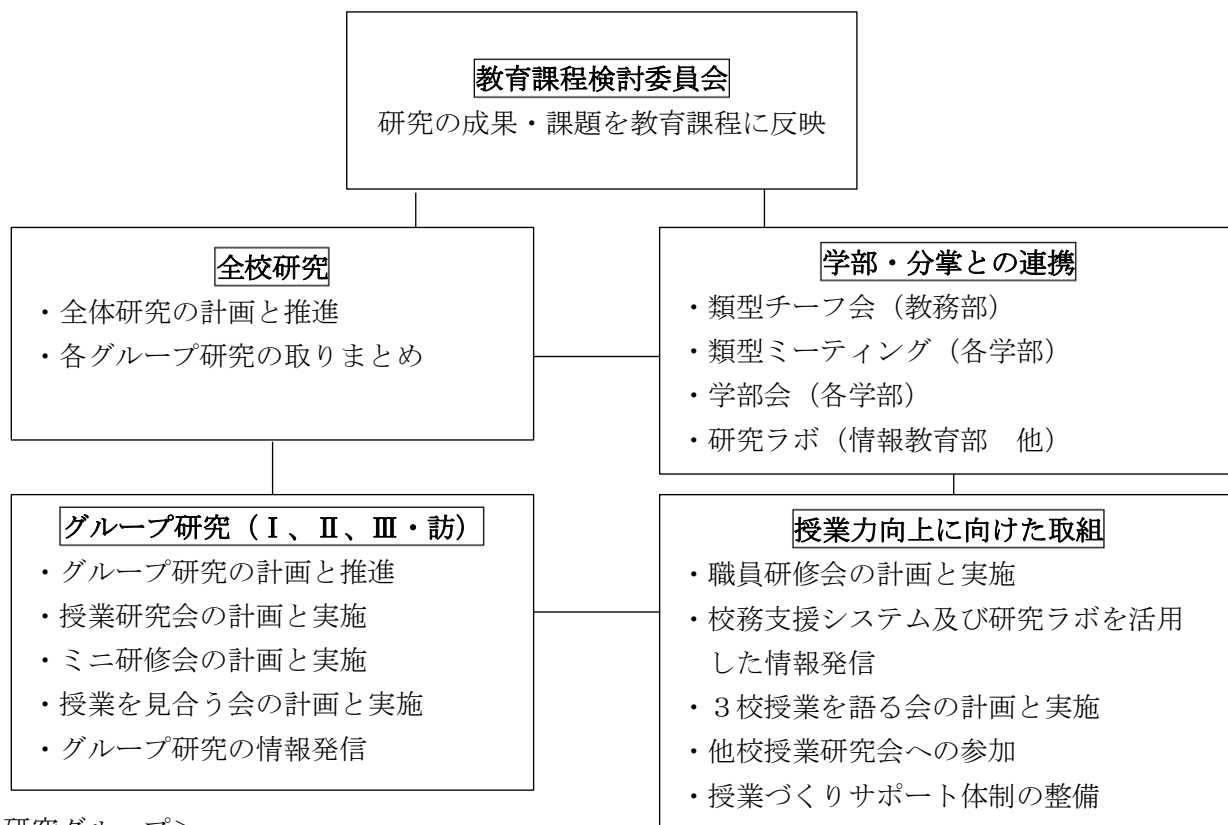
※柳川、若松、富山大附を参考に本校で設定

4 研究仮説

次のことに取り組むことで、児童生徒の資質・能力の育成につながるだろう。

- ・研修会や授業実践等を通して、児童生徒の学びを見取る教師の力の向上を図る。
- ・見取りの視点を整え、複数の教師で見取ったことを共有し、次の指導にフィードバックする。
- ・見取りに関する取組の蓄積や様々な記録方法について整理する。

5 研究組織



<研究グループ>

- ・Ⅰ類型（準ずる各教科を学習するグループ）：各教科 授業研究会
- ・Ⅱ類型（知的代替の各教科を学習するグループ）：国語科 拡大授業研究会（小学部）
- ・Ⅲ類型（主として自立活動を学習するグループ）と訪問部（訪問教育の学習グループ）の合同研究
：国語科 拡大授業研究会（中学部）

※拡大授業研究会には、研究グループに所属する職員に加え、研究授業の対象となる学部職員も参加

6 研究の内容と方法

児童生徒の資質・能力の育成に向けて、学習評価に着目し、評価手段として教師による見取りに焦点を当てて研究を推進する。本研究を進める上で要となる教師による児童生徒の学びの姿の見取りについて、全職員で共通理解を図る。授業実践を通して、複数の教師による見取りやICT等を効果的に活用しながら、多面的・多角的な視点で学習状況を評価し、授業改善につなげていく。具体的な方法は、次のとおりである。

(1) 教師の見取りに関する理解を深める取組

- ・児童生徒の学ぶ姿からの見取り方
- ・ICT等を活用した見取りと分析
- ・見取りに関する職員研修会の実施

(2) 見取りに基づく授業改善に向けた取組

- ・児童生徒の育成したい資質・能力の具体化
- ・見取りによる評価を次の指導へつなげるための授業研究会の工夫
- ・日々の授業改善と学部との連携

(3) 見取りに関する様々な取組の検証

- ・実践を通じた成果と課題の整理
- ・記録ツールの収集と活用方法の検証

7 研究計画

【1年次】(令和7年度)

- ・教師の見取りに関する理解を深め、児童生徒の学習状況の把握や評価手段として見取りを基に授業改善を行う。
 - I期：職員研修会を通して見取りに関する基礎を学ぶ。
 - II期：授業研究会を通して教師で見取りのワークショップを行い授業改善につなげる。研究グループごとに見取りを評価手段とした取組について成果と課題、改善点を整理する。

【2年次】(令和8年度)

- ・1年次の成果を基にして教師による見取りの充実を図る。
- ・見取りを基にした授業改善を展開しながら、児童生徒が身に付けた力を日常生活で発揮する姿を目指した授業づくりを行う。
- ・本校の児童生徒の学びを捉える評価の在り方を整理する。

8 年間計画

実施日	項目	主な内容
4 / 2 5 (金)	全校研究会 I	今年度の全校研究について、教育専門監による研修会
5 / 2 3 (金)	グループ研究①	今年度のグループ研究について
6 / 1 7 (火)	職員研修会①	富山大附属のDVD視聴 「学びあいの場 教師の子どもの見方を豊かにする学びあい」
6 / 1 6 (月) ～ 6 / 2 7 (金)	授業を見合う会	I 類型の教科指導を自由参観
8 / 4 (月)	職員研修会②	外部講師によるオンライン研修会 講師：金沢星稜大学 講師 柳川久美子氏 「教師の学び合いを通じた子どもの内面の見取り」
8 / 2 2 (金)	職員研修会③	演習：見取りのワークショップ（二部制）
9 / 9 (火)	グループ研究②	指導案検討
9 ～ 1 1 月	授業を見合う会	実施時期は各研究グループで設定（直接参観・動画視聴可）
9 / 1 7 (水)	II 類型：研究授業	小学部高学年 2 グループ 国語科（授業提示）
9 / 1 8 (木)	II 類型：授業研究会	小学部高学年 2 グループ 国語科（拡大授業研究会） 指導助言：教育専門監 佐藤 操氏
1 0 / 中旬 (予定)	I 類型：授業研究会	学部・学習グループ・各教科 ※調整中 指導助言：教育専門監 藤原恵理子氏
1 0 / 2 0 (月)	グループ研究③	改善授業の結果報告
1 1 / 1 8 (火)	グループ研究④	見取りに関する取組の整理等
1 1 / 2 0 (木)	III 類型・訪問部 ：授業研究会	中学部 2 組 A グループ 国語科（授業提示・拡大授業研究会） 指導助言：秋田大学大学院 教授 藤井慶博氏
1 2 / 1 5 (月)	グループ研究⑤	見取りに関する取組の整理等
1 / 2 2 (木)	グループ研究⑥	今年度のグループ研究のまとめ
3 / 1 3 (金)	全校研究会 II	今年度の成果と課題、次年度の研究について

※グループ研究の実施日や内容は、各研究グループで設定して行う。上記と一部内容が異なる場合あり

I 期：6 月～ 8 月 II 期：9 月～ 1 2 月